



いとう つとむ  
伊藤 務さん(66歳) 愛西市早尾町

## 産直の魅力を考えながら

産直部会員として愛菜耕房に野菜を出荷している伊藤務さん。庭先にある8アールの畑で様々な作物を育てており、多い時には一日で10種類以上を売場に出品しています。

産直部会加入のきっかけはもったいないという思いでした。「庭先の手入れで始めた家庭菜園でしたが、野菜が食べきれず、売ることが出来ないかと考えていました。そんな折に新規産直会員の育成を行う就農塾の存在を知り、応募しました」と伊藤さんは話します。就農塾を修了し、実際に出荷を始めたのが昨年の11月末で、一年が経ちました。

今年の2月末に定年退職した伊藤さんはサラリーマン時代、小売の仕事に携わっていました。その経験から、育てる作物の品種や売り方について、常にお客さんの目線に立つことを意識しています。「新鮮な野菜を届けたので、量と値段はその日のうちに売り切れるように気を配っています。そういった意味で少ない量でも出せて、自由に値段を決められるのは作り手としてありがたいです。作物についても珍しい品種や時期をずらしたも

のが売場に並んでいると目を引きますし、売り場にも『産直らしさ』が出るように思います。売れ行きなんかも確認して、いつも『次は何を育てようかな』と考えています」と話してくれました。

その言葉の通り、伊藤さんの畑には様々な作物が植えられています。芽キャベツやチヂミ菜のような珍しい作物、トウモロコシ、新タマネギなどのこの時期にはなかなか見かけないもの等、「どのくらいまで時期をずらして育つかなども試しています。常に土地を空けずトライ&エラーで次に活かしていきたいです」と語る伊藤さんが今特に熱を入れているのがチンゲンサイ。「一度店頭に並べて手ごたえを感じました。夏場の害虫防除は大変でしたが、それを乗り越えて今は涼しく、育てやすい季節です。このまま年間を通じて出せるようにするのが今の目標です」と意気込みます。

最後に読者の皆さんへ向けて「なかなか見かけない珍しいものが産直には置いてあります。ぜひ見に来て欲しいです」とメッセージをいただきました。